

Our Exploits at West Poley (1892-3) にみる Hardy の不安と焦燥

大野成司

はじめに

87歳という長寿を全うした Thomas Hardy (1840-1928) はその長い文筆生活の中で、数多くの作品を残したが、その中に子供向けの冒険物語があることを知る読者は少ないのではなかろうか。もともと、この冒険物語 *Our Exploits at West Poley* (以下、WP) はアメリカの子供向け雑誌からの依頼で書かれた連載物であった。原稿は1883年に完成していたが、雑誌の連載が始まったのは1892年から翌年にかけてであった。なおイギリスのマクミラン社版の全集にこの作品が収められたのは1977年、廉価版の出版が1981年であるから、ながい間散逸していた作品といえる。¹

Hardy と聞いて *Tess of the d'Urbervilles* (1891) や *Jude the Obscure* (1896) をまっさきに思い浮かべるのは筆者だけではあるまい。これらの代表作に浮き彫りにされる彼の人生に対する洞察は、ギリシャ悲劇にも通ずるような宿命論がその土台となっている。人間とは神々の気まぐれであやつられ、神々もたらす災いによって翻弄される、はかない、無力な存在である、と。ただし彼はこの人間の力ではどうにも抵抗することのできない力を「宇宙の内在意志」と呼び、人間の生とは、その不可避で絶対的な力との衝突の連続であると考えた人であった。このような人生哲学をもつ Hardy は、子供達に一体どのような物語を書いたのであろうか。この素朴な疑問が本稿の出発点である。

筆者はまた、この厭世主義者を思うとき、アメリカの作家 Mark Twain (1835-1910) を思い起こさずにはいられない。大西洋をはさんでほぼ同時代を生きた二人は、共に宗教に対して懐疑的な立場をとり、作風こそ違いますが本質的にペシミスティックな作品を世に送り出した。二人の著作の中には同じように不道德であると非難され、あるときには公衆の面前で焼かれ、またあるときには図書館から締め出されるという憂き目にあった作品がある。これらの共通点は単なる偶然ではなく、二人が共に Darwin の進化論の申し子であったことと関係している。つまり中世以来続いてきた神の啓示による真理と理性による真理という大きな2本の柱のそりがいよいよ合わなくなった時代の人間であったということである。その Twain も子供向けに *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) を書き残したが、この作品が単なる子供向けの物語でないのは周知の通りで、いまなお様々な解釈を生み出し続けている。すればこの Hardy の WP も子供向けの冒険物語という枠から、さらに踏み込んだ読みが可能ではないかと考えられる。そこで本稿では、まず「失敗した男」と称する人物を通して子供達に語られる Hardy のメッセージを読み取り、さらにこの作品の語りの特徴を手掛かりに、この冒険物語を読み解いてみたい。

I

Hardy は小説の舞台となる現在のドーセット州およびその周辺を、イギリスの古代王国の名にちなんで、ウェセックスと名づけ、細かい地名にも彼固有の呼び名を用い、作品群に地理的統一を持たせたが、この WP もそのウェセックスに想定されたウエスト・ポーリーという村が舞台となっている。村の名は架空のものであるが、作品中の洞窟は、現在のサマセット州に実在する鍾乳洞をモデルとしている。ごくかいつまんで、あらすじを紹介しておく。

(あらすじ)

ある秋の休暇に、少年レナードはウエスト・ポーリーという村にある叔母

と従兄弟スティーブとが経営する農場を訪れる。レナードは年上のスティーブと一緒にニックス・ポケットという洞窟に探検に出かけ、村人が行き止まりだと思っているところから、さらに奥に入って洞窟内を流れる水脈を発見する。そしてその流れの対岸に結晶石でできた美しいくぼみを見つける。二人にはそれがまるで水晶の玉座のごとく魅力的に見えるのだった。濡れずにそこにたどり着こうと、スティーブは土手をけずりとして、流れを近くにあった穴に流し込んでしまう。冒険に満足してウエスト・ポーリーの村に帰ってみると、村の生活に欠かせない川が干上り、村中が大騒ぎになっていた。洞窟の水流は、村を流れる水車場川の水脈だったのである。事情を察した二人は洞窟に戻り、土手を築き直し、流れを元通りにした。村に帰ってみると、川は再び流れ出しており、村人も落ち着きを取り戻していた。

数日後、二人が隣村のイースト・ポーリーへ遊びに出かけると、イースト・ポーリーに新しい川が沸き出しており、村人達が狂喜していた。スティーブが築き直した土手が水圧で自然に崩れ、水脈が再び例の穴に流れ込んだのだ。再び川が干上がってしまったウエスト・ポーリーに戻ってみると、水車小屋で粉屋の奉公人ヨブが主人グリフィンにひどい仕打ちを受けている。川が干上がり仕事ができなくなった主人がヨブに当たり散らしているのだ。気の毒に思ったスティーブは、偶然通りかかった自らを「失敗した男」と称する村人に仲裁に入ってもらいヨブを助ける。粉屋としての仕事がないあいだ粉屋には、法律上ヨブを奉公人として束縛する権利がないことがわかったのである。

その夜二人はスティーブの農場の井戸に水をもらいに来た村人達が、川が干上がったのはきっと魔法使いの仕業だと噂するのを聞く。その噂をヒントにスティーブは水脈の秘密を利用したあるいたずらを思いつく。それはヨブを仲間に引き入れ、あらかじめ時間を決め、イースト・ポーリーに流れている川を洞窟で待機するヨブの水脈の操作で一時的に止めてもらい、それをあたかもスティーブとレナードが変装した魔法使いの魔力のようにみせかけ、イースト・ポーリーの子供達を驚かそうというものだった。いたずらは成功を収めるが、帰りにイースト・ポーリーの穀物商人が新しくできた川で水車

場を作ろうと自分の貸家に住む婦人の庭を水浸しにし、追い出そうとしているところを目撃する。この身勝手な穀物商人に憤慨した二人はもとのウエスト・ポーリーに流れを戻すことを考えるが、すると今度はヨブがひどい主人の待つ水車小屋に戻らなければならない。洞窟でそろった三人は、流れをどうすべきか考えあぐねた末、ヨブが新たに見つけた穴に水を流し込む作業にとりかかる。ところが、この穴はただのくぼみにすぎなかった。ウエスト・ポーリーとイースト・ポーリーに流れる二つの穴を土砂でふさいでしまっていたので、洞窟の中はさしずめ水がめのような状態で増水しつづけ、三人が溺れ死ぬのは時間の問題となった。しかし、レナードが洞窟の天井に裂け目を見つけて、そこに石を投げてみると、洞窟の天井部分にあたる丘陵を歩いていた靴屋と粉屋がそれに気づき、村人総出の救出作業が行われた。三人が助け出された直後、洞窟の水は自らの重みで再びウエスト・ポーリーの流れ口に流れだした。

スティーブはこの先、なにかの偶然で流れが変わってしまった時のことを考慮して、ウエスト・ポーリーの村人にニックス・ポケット(洞窟)が、水脈のある洞窟に通じていることや、流れを西の谷にも東の谷にも変えられる仕掛けのことを明らかにし、さらに村人に以後川がイースト・ポーリーに流れ出さないように、その穴を塞いでくれるように頼むのだった。ところが、村人が行ってみると、すでに秘密は漏れており、イースト・ポーリーの村人が逆に西の谷に流れる穴を塞いでいるところであった。これをみてウエスト・ポーリーの村人は洞窟の出口を塞いで、彼らを閉じ込めたのでイースト・ポーリーの村人は降参せざるをえなかった。

しかし、数カ月たった頃、「失敗した男」が看破したとおり、水脈を巡る争奪戦は再び繰り返された。大修復ののち川はウエスト・ポーリーに流れるが、その数日後またしてもイースト・ポーリーの村人に水脈が細工されると、これに責任を感じたスティーブは、火薬で水脈へ通じる洞窟を埋めてしまうという大胆な計画を実行に移し、危険な目にあいながらも成功させるのだった。

II

子供向けの物語とはいっても、Lewis Carroll (1832-1898) の *Alice in Wonderland* (1865) といったファンタジーの要素が強い作品とは全く違う種類の物語であることは、うへのあらすじを一読していただければ、わかると思う。Hardy は作品から桁外れの荒唐無稽さを排し²、牧歌的雰囲気の中にも、より現実味のある物語を書き上げ、さらに子供達にもわかるような教訓をいくつか盛り込んでいる。子供向けの物語という枠を取り払ったとき我々読者は、ひとまず WP をイギリス近代化の過程で滅びゆく田園牧歌的世界への淡い感傷としてとらえることができよう。しかし、この物語の妙な現実感がこの作品が単なる感傷として書かれたのではないことを物語っている。差し当たって、ここでは子供達への Hardy からのメッセージである教訓に注目してみたい。この教訓は、ウエスト・ポリーの住人の「失敗した男」"the man who has failed" なる人物を通して語られる。Hardy は *Adventures of Huckleberry Finn* のハック少年や *Alice in Wonderland* のアリスのような魅力的な子供の主人公を作り出すことはできなかったが、この謎の男を登場させることで、物語に厚みを与えることに成功した。この男はまず冒頭部分で、親の跡を継ぎ、農場主になることに不満を抱くスティーブを次のように諭す。

"The straight course is generally the best for boys,···Be sure that professions you know little of have as many drudgeries attaching to them as those you know well - it is only their remoteness that lends them thier charm." (pp.3-4)

たいていの場合、まっすぐな道が、男の子にはいちばんいいのだよ。···君たちが知らない職業にだって、君たちがよく知っている職業と同じように、いやなことがたくさんあるものさ。それがよく見え

るのは、ただ遠くからみているせいなのだよ。

ここでの男の言葉は、ともすれば、他人への羨望やねたみを戒めた「隣の芝は緑に見える」という格言を思い起こさせるが、しかし Hardy は、そのような一般的な人の心性を云々しようとしたのではない。むしろこの言葉はより現実的な処世術にかかわるものである。当然のことながら、これを理解するには、当時のイギリスの社会状況を考えればよい。18世紀後半、合理主義の下で行われたイギリスの産業革命は、19世紀に入ってその工業力を発展させ、ヨーロッパの競争国との格差を一層広げていった。そして19世紀も70年、80年代になるとヴィクトリア朝時代の繁栄の恩恵は一部の特権階級だけでなく、一般市民にまで及ぶようになった。このような上昇気運の社会は、活気と同時に混乱を呈するものである。この混乱は多くの場合、社会の諸制度が現実の変化に追いついていけないために起こるのであるが、このような過渡期の社会にはこの不備につけこんで、ひと儲けしようとする輩が必ず出てくるものである。そしていつの世も、その犠牲となるのは無知蒙昧な一般市民である。つまり Hardy はそのようないい話に惑わされることなく、まっとうな仕事につき地道に生きよ、と諭したわけである。このことは物語の最後で、ステイブがその地方きっての大農場主になり、投機的な商売にいつさい手を出さないことでよく知られる人になったというくだりで締めくくられている点を見てもあきらかである。さらに男の言葉に注目してみよう。

“Your cousin, like all such natures is rushing into another extreme, that may be worse than the first. The opposite of error is error still; from careless adventuring at other people’s expense he may have flown to rash self-sacrifice. He contemplates some violent remedy, I make no doubt.” (pp.79-80)

君のいとはああいう性質の人たちによくあるように、また別の極たんに走ろうとしているのだ。まえより悪いことになるかもしれなぞ。

あやまちの逆にはまたあやまちがあるだけなのに。あのはた迷惑な向こう見ずの冒険からせつかな自己犠牲に走ったのかもしれない。彼は何か強引な解決策を考えているのだ。きっとそうにちがいない。

スティーブは洞窟から救出されたあとも、水車場川の水源の秘密をひとり胸の奥にしまいこみ、ひとり悩んでいたために、その精神的負担が原因で身体の回復を遅らせた。そしてイースト・ポーリーの村人による水脈への来襲が三度つづくと、問題解決のためにひとり行動にうつる責任感の強い子供であった。男はそんなスティーブの性格からくる生真面目さや性急さを憂れていたのである。Hardy の機械論的な人生観は序論で触れたが、彼はその人生を支配する目に見えぬ力が、その人の性格にも影響を及ぼすと考えた。³つまり個々の人間の意志を越えた宇宙的意志が、偶然の出来事や人間のまわりに存在する自然を通して知らぬまに、人間の心の中に入り込み、その人の性格そのものを、理性や意志のコントロールの外におくものと考えたのである。ここはそういった Hardy 特有の人の性格に対する考えがあらわれていて興味深い。

最後はスティーブに対する苦言である。水脈へ通ずる洞窟を火薬を使って埋めてしまったあと、男はスティーブの勇気を称えながらも、あえて次のように言う。

“Though this has worked well, it is by the merest chance in the world. Your courage is praiseworthy, but you see the risks that are incurred when people go out of thier way to meddle with what they don’t understand. Exceptionally smart actions,such as you delight in, should be carefully weighed with a view to their utility before they are begun. Quiet perseverance in clearly defined courses is, as a rule, better than the erratic exploits that may do much harm.” (p.83)

こんどはうまくいったけど、これはまったくの偶然にすぎないのだ

よ。君の勇氣はたいしたものだけど、人は自分でよくわからないことに手を出して余計なことをすると、とんでもない危険におつかることが君にもわかったはずだ。君たちがよろこんでいるとても立派な行動もそれをはじめのまえには、結果をよく考えて注意深く検討すべきなのだ。ちゃんとはっきりしている進路を、じっとしんぼうして進むことが、たいていどんな災難を招くかもしれない気まぐれな冒険よりすぐれているのだ。

冒険物語がこのようなお説教で締めくくられるのも奇妙なものであるが、ステューブの計画の成功を単なる偶然とみる厳しい目は、この言葉が一般論にとどまらない Hardy のメッセージとしての証しである。いずれも男の言葉は時代の大きな転換期において思慮分別の大切さを説いているように思えるのであるが、それは当時の時代背景や彼の人生観とに照らし合わせるとより整合的に理解できるのである。それではさらに踏み込んでこの WP を読み解くために我々は何に注目すべきだろうか。それは以上のように冒険物語に一番そぐわないと思われる慎重論がメッセージとして発せられている点である。

III

さて表題の exploits とは「英雄的行為」、「偉業」、「手柄」のことで、無論ここでは、ウエスト・ポリーの川の水を守ったステューブの「手柄」のことである。ならば雄弁をもって語られてよいはずの物語である。ところがこの冒険譚を読んで感じることは、全編に奇妙な静けさが漂っていることである。子供のために書かれた冒険や探検をイメージしたときに喚起されるあの無邪気な子供達の奔放さや活気というものが希薄である。無論、それは単に舞台が鍾乳洞やカントリーサイドであるからではない。さきほど、ステューブの行動を気まぐれの冒険であり、成功は単なる偶然にすぎないと裁断する男の言葉を引用したが、じつはこの冒険に対する否定的態度が、語り手レナ

ードにも同様に見受けられるからである。しかもそれは物語を過去の出来事として回想する際だけでなく、物語が進行している時点においてもそうなのである。つまりレナードの冒険をめぐる言説は負のイメージに満ちており、それがこの物語の大きな特徴となっている。先の奇妙な静けさとは、結局子供らしい無邪気な判断が留保されて語られるためである。いくつか具体的にレナードの語りを引用しよう。

It would have been just as well for us two boys if nothing more had been said about them at all; but it was fated to be otherwise, as I have reason to remember. (p.5)

もしそのこと(洞窟のこと)がこのまま話題にのぼらなかったら、私たち二人にとっては、かえってその方がよかったことでしょう。しかし運命は、いまでも私がそれをはっきり覚えている理由があるように、そうはならなかったのです。

これは導入部分のレナードの言葉であるが、彼がはっきりとこの事件を起こらねばよかったともものとしてとらえていることがわかる。

I am sorry to say that my weak compunctions gave way under stress of this temptation;···(p.24)

残念ながら私の良心は、ここでもろくもその誘惑にまけてしまったのです。

洞窟の水源の秘密を利用したいたずらをスティーブにもちかけられたとき、レナードは諸手を挙げて賛成したのではなかった。川が干上がって困っている村人を尻目にいたずらすることに対して、彼の心の中ではすでに良心の葛藤があったことをこのセリフは示している。また、いたずらのあと三人(ス

ティープ、レナード、ヨブ)で水をどちらの村にながすべきかを考えたとき、自分たちの判断だけで、ふたつの村から水を取り上げてしまってよいものかと自問するのはレナードであったし、自分たちが抱え込んでしまった水源の秘密を常に誰か信頼のおける大人に打ち明けるべきだとステープに進言するのもまた彼であった。

「失敗した男」の言葉に託された Hardy のメッセージだけでなく、以上のような語り手の内省的なスタンスも、この物語に陰影をもたらしているのだが、例えばステープの冒険(偉業)をヴィクトリア朝時代の躍進と見立てるならば、この語りにつきまとう負のイメージは、Hardy 自身のその時代の偉業に対する心情を照射したものと解釈できはしないだろうか。つまりヴィクトリア朝という時代が辛うじて保っていた平衡に懐疑の目を向ける Hardy の心情である。一方で平和と繁栄をもたらしたヴィクトリア朝時代は、他方では急激に進む工業化によって国民生活に様々な歪みをもたらした時代でもあった。その歪みは都会への人口流出による都市問題や貧困階級の問題など、今まで経験されたことのない社会現象として表面化していった。時代の急速な変化に伴うそうした苛酷な現実を Hardy は苦々しい思いで見つめていたにちがいない。とすれば、子供のために書かれた作品にもかかわらず、この WP の中でも Hardy が抱く時代に対する危うさや問題意識を読み解くことは可能である。

このような視点から、先程の「失敗した男」とはどんな男だったかを今一度考えてみたい。物語の要所要所に現れるこの男は、レナードの言葉によれば“a thoughtful man in a threadbare, yet well-fitting suit of clothes”であり、ステープの言葉をかりれば“*He's a man who has been all over the world, and tried all sorts of lives, but he has never got rich, and now he has retired to this place for quietness.*”という人物である。擦り切れた服を着た隠居人、すなわち物質的繁栄にも社会的地位にも縁のない人間である。つまりこの登場人物はヴィクトリア朝時代を謳歌した新興中産階級の多くの人々が抱いていた立身出世、社会的成功への期待というモチーフを覆し、対象化、相対化する人物なのであって、擦り切れた服を着た彼が村の誰よりも見識を

備えたひとかどの人物として描かれていることが、ある意味で安易な物質的繁栄に墮した当時の人々に対する風刺、批判となっているのである。

このように「失敗した男」が Hardy のメッセージを伝えるためだけの分身でないという認識から、さらに主役の子供達について考えてみると、子供イコール無垢という一義的な解釈が確かに一面では正鵠を得るものの、反面、作品の奥行きを見落とすことに気づくのである。とはいっても、スティーブやレナードに全く子供らしさがないというのではない。水源に通じる洞窟を見つけることができたのは、もっぱら彼らの純粋な好奇心のせいであり、またそこで見つけた結晶石でできた美しいくぼみに感動したのは、邪心のないこころゆえである。しかし、この地下水脈が村を流れる川の水源であることを知ることによって、二人は大人の世界にからめとられていく。

‘Well,’ exclaimed I, ‘I could stay here always!’ (p.10)

「ふうーむ、ここにずっとこうしていられたらなあ。」と私は叫びました。

はじめのうち、洞窟の探検を躊躇していたレナードでさえ、このように魅せられた秘密の場所は、しかし村に帰るやいなや心の重荷と変わってしまう。

As soon as we had recovered ourselves we walked away, unconsciously approaching the river-bed, in whose hollows lay the dead and dying bodies of loach, sticklebacks, dace, and other small fry, which before our entrance into Nick’s Pocket had raced merrily up and down the waterway. (p.17)

やがて我に返った私たちは、すぐそこを立ち去りました。そして知らずしらずのうちに河床に近づいてみると、水の引いたあちこちのくぼみには、さっき私たちがニックス・ポケットに入るまではあんなに楽

しように、流れをあちこち泳ぎまわっていたドジョウやトゲウオやウグイが、ほかの小魚にまじって死んだり死にかけたりして、ころがっていました。

村に帰って、自分たちの冒険が招いた思いもよらぬ結果をみずからの目で確かめる場面では、干上がった川床でうごめく魚が、スティーブとレナードの不安と動揺を形象化している。そしてこの不安と動揺は物語の最後まで二人の心から拭いきれないままである。

物語は無垢で無邪気な子供の世界、その閉じられ、完結した世界を描いたのではなく、むしろ水脈の発見を機に実利的な大人の世界へ放り込まれた少年達の悪戦苦闘を描いたものといえよう。スティーブはこの事件をどうにか自分達子供の手で収めようとするが、それはせっかく見つけた絶好の隠れ家、自分たちだけの世界を大人たちに明け渡したくないからであった。これに対してレナードは、前述した通り常に一步引いた態度で状況を見つめ、ことあるごとに洞窟の秘密を理解ある大人に打ち明けて心の重荷を解きほどこうとする。しかし、年長のスティーブに逆らうわけにもいかず、心が落ち着かずにいる。このような違いはあるにせよ、二人はウエスト・ポーリーとイースト・ポーリーの二つの村の中で水脈の流れ一つが様々な人の利害にかかわっていることを知るようになる。

IV

この過程で明らかになるのは、子供の世界と対置された打算的な大人達の世界である。その典型的な人物として描かれるのがウエスト・ポーリーの粉屋のグリフィンである。

'I don't drink hard; I don't stay away from church, and I only grind into Sabbath hours when there's no getting through the work otherwise, and I pay my way like a man!' (pp.11-12)

「わしは大酒のみじゃあない。教会にだってちゃんと行ってるし、間に合わない時は別として、休日に粉をひくこともない。他人に借金もせず、男らしく、きちんと暮らしてるんだ。」

このように自分自身を評する彼も、川が干上がったことがきっかけでその素性があきらかにされる。ヨブとのあいだにかわされた年期奉公契約書の条文によれば、川の水が干上がって粉屋の仕事ができなければ奉公人のヨブにはグリフィンの水車場にとどまる義務がなくなる。しかし、グリフィンはこれを認めず、ヨブに雑用を強い、抵抗すれば鞭で虐待するという暴君としての性格をあらわにする。しかも彼は小麦相場に手を出して金をすっかり使い果たしていたので、ヨブに給料さえ払っていなかったのである。そしてもうひとりにはイースト・ポーリーの穀物商人である。彼は新しく流れ出した川を利用してひと儲けしようと水車場を作ろうとする。しかし川下では費用がかさむため、川沿いにある自分の貸家の庭を利用するが、そこに住む婦人のことなど考えもしない。他の場所で作れないものかと懇願する婦人に、最後には法的権利をふりかざし家から追い出そうとする、まさに金の亡者である。また、この二人に限らず、イースト・ポーリーの村人の次のようなセリフからも打算的な大人の世界がうかがい知れる。

‘It will make all land and houses in this parish worth double as much as afore,’ said another; ‘for want of water is the one thing that has always troubled us, forcing us to sink deep wells, and even then being hard put to, to get enough for our cattle. Now, we have got a river, and the place will grow to a town.’

‘It is as good as two hundred pounds to me!’ said one who looked like a grazier.’

‘And two hundred and fifty to me!’ cried another who seemed to be a brewer.

‘And sixty pound a year to me, and to every man here in the building

trade!' said a third. (p.21)

「おかげでこの村じゃあ、土地も屋敷も、いままでの二倍の値が出るだろう。」ともうひとりの人が言いました。「いままでは水が足りなかったもんで、いつもそれがわしらの悩みのたねで、深い井戸も掘らなければならなかったし、掘っても牛を育てるには十分手に入らなかったんだ。それがいまじゃあ、川ができたもんで、ここもきっと町みたいのにぎやかになるぞ。」

「わしにとっては、二百ポンドの値打ちがあるぜ、まったく。」と牧畜業者らしい人が言いました。

「わしには二百五十ポンドだな。」と今度は醸造業者らしい人が言いました。

「おれにしても、いや村の建築業者の誰にとっても、年に六十ポンドだ。」三人目の人が言いました。

複雑に利害が絡み合った世の中を眼前にして、スティーブはもはや自分の絵にかいた餅のような公正さが、通用しないことを悟るのである。

'I perceive that it is next to impossible, in this world, to do good to one set of folks without doing harm to another.' (p.34)

「世の中では片方の人に損をさせず、もう片方の人に得をさせるなんて、とても無理なんだ。」

当然ながら、この大人達と渡り合っていくなかで子供たちは無垢のままではいられない。例えば、三人でやった魔法使いのいたずらは一見、他愛もない遊びに見えるが、しかしその綿密な計画性や結果的にイースト・ポーリーの子供達からりんごをだまし取るという行為の本質にはあきらかに子供らしさを逸脱した部分がある。そもそも、このようないたずらを考え出すのは川の

流れを操作できるという、いわば自然を征服した優越感とそこから生まれるおごりからである。いたずらの際のスティーブはひどくえらそうな歩き方をしていたというレナードの回想も暗示的である。また、洞窟での救出場面でかわされるグリフィンとヨブとのやりとりはヨブが大人のやり方を身につけていることを雄弁に物語っている。ヨブは誤って水に落ちたグリフィンを水から引き上げる前に、彼に次のように宣誓をさせる。「もし私がまたヨブ・トレイを、たたくようなことがあったら、ヨブはただちに自由の身になって、ほかの働き口をさがしても文句はありません。私、粉屋グリフィンはそれをかたく誓います。」つまりヨブは年季奉公契約書で奪われていた自由を、宣誓という一種の契約で取り返してみせたのである。

V

しかし、彼らがここですんなりと大人になっていくわけではない。WP は決して教養小説 (Bildungsroman) ではない。依然スティーブには粉屋と穀物商人に対する強い反発があるから、最終的に川をどちらの村に流すべきかの判断ができない。新しく見つけたもうひとつの穴に水を流し込んだものの、水がどこにも流れ出ないで洞窟に溜まって、結果的に生命の危機を招いたのは、彼の行動原理が大人の世界で破綻をきたしたことを象徴している。それではスティーブの行動原理とは何か。それは粉屋の暴力や穀物商人の横暴に無条件に反発したあの正義感である。そして彼が最後までこの正義感を持ちつづけ、彼なりに責任を全うしたことがこの物語の救いでもある。ただし、問題は解決法が火薬による洞窟の爆破という無謀ともいえる方法であった点である。筆者はここにもまた Hardy の時代に対する複雑な心境が投影されているように思う。多くの弊害をもたらしながら猛烈な勢いで膨張していく産業資本主義。もはやそれを生み出した人間でさえコントロールできないようなシステムの怪物に対する不安、あるいは限りない進歩を保証してくれると思われた近代科学が思いがけずもたらした信仰上の不安、こうしたものがスティーブの抱えこんだ不安になぞらえるならば、洞窟の爆破とはそのよう

な不安に対してどう対処すべきかがわからずに苦悩する Hardy のあがきとも解釈できる。ゆえに洞窟の爆破は最善の策ではなく、まさに窮余の策でしかなかった。子供のために書かれた物語であるにもかかわらず、すっきりとした結末となっていないのはこのようなことが関係しているのではないか。醒めた目で時代をじっと傍観するしか術のなかった文人としての彼の心境は、増水をつづける洞窟のなかで年長のスティーブとヨブの作業を見守るしかなかったレナードのせりふにあらわれる。

My suspense was, perhaps, more trying than that of the others, for, unlike them, I couldn't not escape reflection by superhuman physical efforts... but I would gladly have changed places, if it had been possible to such a small boy, with Steve and Job, so intolerable was it to remain motionless in the desperate circumstances. (p.41)

おそらく私の不安は、二人のそれよりも、もっところえがたいものでした。私は二人の場合とちがって、めっちゃめっちゃに体を使うことで、その不安な心をまぎらすことができなかつたのですから。…しかし、もし私のような子どもにでもそれができるのだったら、私は喜んでスティーブやヨブと、仕事の役割をかえていたことでしょう。こうした絶望的状况の中でただじっとしているのは、それほど耐えがたいことでした。

子供達が偶然見つけた水源のからくりは、〈大人〉の世界と〈子供〉の世界を露呈させるだけでなく、様々な関係、対立項を顕在化させる機能をはたしていることが分かる。まず川の流れを操る子供達や二つの村の間に起こる水源の争奪戦には〈自然〉を征服せんとする〈人間〉が浮き彫りにされる。しかも、その自然は好ましい牧歌だけを与えてくれるものとしてでなく、意外な脆さや恐ろしさを持ち合わすものとして描かれる。さらにグリフィンとヨブあるいは穀物商人と貸家の婦人との関係には社会における〈抑圧者〉と

<非抑圧者>との関係を読み取ることができるし、多くの登場人物がこの事件を契機に<自己>を見つめ直し、あらためて<他者>を認識するといえる。それではこのような機能を持つ水源のからくりとは一体何を意味するのだろうか。それは現実的レベルでは、ダーウィンの進化論が神の啓示に対して突きつけた科学的仮説であり、象徴的レベルでは結果的に人間に不安と混迷を引き起こした近代科学の合理精神そのものと考えられよう。

注

- 1 この作品の出版事情については、(株)千城から出版されている注釈付きのテキスト版 *Our Exploits at West Poley*(1985)のはしがきにまとめられている。
- 2 例えば、子供であるスティーブがなぜ、いとも簡単にすき一本で洞窟内の川の流れを変えることができたのか、Hardy は次のように地理学的知識で説明する。

Such instances of a slight obstruction diverting a sustained onset often occur in nature on a much larger scale. The Chesil Bank, for example, connecting the peninsula of Portland, in Dorsetshire, with the mainland, is a mere string of loose pebbles; yet it resists, by its shelving surface and easy curve, the mighty roll of the Channel seas, when urged upon the bank by the most furious south-west gales. (p.9)

こうしたほんのわずかな障害物が、しつように襲いかかる猛威をわきへそらす例なら、しばしば自然界では、さらに大きな規模で見られるものです。たとえば、ドーセット州ポートルランド半島と英国本土を結ぶチセル堤防は、もろい小石のつながりにすぎないのですが浅瀬のようななだらかな表面とゆるい曲線でもっともはげしい南西の暴風がこの堤防に吹きつける時でも、あれ狂う海峡の怒濤に抵抗しているのです。

また結末部分では、スティーブが火薬を使って水脈につながる洞窟を埋められると確信するに至った理由がしっかり書かれている。

With this in view he had privately made examination of the cave; when he discovered that the whole superincumbent mass, forming the roof of the

inner cave, was divided from the walls of the same by a vein of sand, and that it was only kept in its place by a slim support at one corner. It seemed to him that if this support could be removed, the upper mass would descend by its weight, like the brick of a brick-trap when the peg is withdrawn. (p.82)

こうした目的で彼は洞窟をこっそり調べてみました。その時、奥の洞窟の天井を形成している岩盤が、同じ岩石層の壁とはひとすじの砂岩質の鉱脈で区切られていて、それが一個所、すみのところで、細い支柱に支えられているだけだということを見つけたのです。もしその支柱を取り去れば、支えをはずされたレンガわなみたいに、上の岩盤がその重みでくずれることがわかったのです。

以上のような細かい記述には、自然主義作家としての Hardy の実証主義的態度がうかがわれる。

- 3 Hardy のいう宇宙の内在意志が、人の性格に影響を及ぼすというテーマは *The Mayor of Casterbridge* (1886) に顕著にあらわれている。エキセントリックな性格を持つマイケル・ヘンチャードの成功と破滅の物語。ここでは数々の偶然が、彼の心の中に傲慢さや頑固さ、嫉妬心を生み出し、彼自身もそれを抑えることができずに破滅へと向かう。

参考文献

Thomas Hardy, *Our Exploits at West Poley*, (Tokyo : Senjo Publishing Co., Ltd, 1985)

トマス・ハーディ, 石川康弘訳, 「ウェスト・ポーリー探険記」千城, 1985年

*引用はすべて上掲書による。なお、英文のみ括弧内に頁数を記して表示。

深澤 俊(編), 「ハーディ小辞典」研究社, 1980年

片山 俊, 「研究社英米文学評伝叢書-66-ハーディ」研究社, 1980年

トマス・ハーディ, 小林清一訳, 「ハーディ傑作短編集」千城, 1991年

出口保夫(編), 「世紀末のイギリス」研究社, 1996年